

リーダーたちの本棚

Leaders as Reader

L アジア発の「人生を楽しむ保険」

【率いる】 Leading

FWD富士生命は、パシフィック・センチュリー・グループの保険事業部門としてアジアで事業を展開するFWDグループの日本法人。FWDは2013年に設立し、香港・マカオ、タイ、インドネシア、フィリピン、シンガポール、ベトナム、日本、マレーシアに進出。現在、中国展開の準備も進んでいる。

「FWDグループは、成長めざましいアジアの各市場で年40%~50%の成長を目指しています。当社の日本での総資産は8,800億円超(2019年3月末現在)と、規模ではまだまだ小さな存在ですが、魅力的な商品をご提供できれば、毎年2桁成長を期待できると考えています」と、友野紀夫社長。

ブランドビジョンは、「人々が抱く『保険』に対する感じ方・考え方を刷新すること」。いわゆる「漠然と将来の不安に備える保険」とは一線を画した「今を思いきり生きるためのエネルギーとなる保険」がコンセプトだ。

「収入保障保険『FWD収入保障』、がん保険『新がんベスト・ゴールドα』など、シンプルでわかりやすい設計の商品をそろえています。お客様には将来の不安を感じることなく、人生を思いきり楽しんでいただきたい。そのサポートができる存在になることを目指しています」

強みは人材とテクノロジー

友野社長は、再編に次ぐ再編の生保業界において、会社の破綻・吸収・合併・改称などを数々経験している。

「最初の勤務先である千代田生命では、財務部門に長くいました。主軸の保険部門ではなかったわけですが、破綻の半年前というタイミングで経営企画部に異動。社長と行動を共にすることになりました。すでに『Xデーはいつか?』という経営状況でしたので、Xデーの前後に行うべき会合や事務手続きの準備に追われる日々でした」

同社は2000年に破綻、翌年AIGスター生命へと名前を変えて再生に踏み出す。その後、プルデンシャル・ファイナンシャルに買収されたことに伴い、ジブラルタ生命と統合。一方、2013年4月、AIG傘下の富士生命が、AIG富士生命に改称。その折に代表として白羽の矢が立ったのが、AIGスター生命の社長やジブラルタ生命の副会長を歴任した友野さんだった。そして2017年、FWDグループがAIG富士生命を買収。FWD富士生命として新たなスタートを切った。

「当社には多様なバックグラウンドをもった人材が多く、その国籍も様々ですが、競争の激しい日本市場におけるビジネス体験の価値を共有しています。一方、日本の先を行くアジアのテクノロジーもグループの強みです。互いの特色を生かしながら成長を目指していきます」

多様な人材を率いる上で、どのようなことを心がけているのか。友野社長は、アンドリュー・カーネギーの墓碑に刻まれている「己よりも優れた者に働いてもらう方法を知る男ここに眠る」という言葉を座右の銘にしている。

「己を客観視して不足を自覚し、それを補ってくれる優れた人材を見だし、力を発揮してもらう。経験上、これがいちばん自分に向いている率い方かなと思っています」

■朝日新聞社メディアビジネス局ウェブサイトでは、友野紀夫さんが語るリーダー論を紹介しています。
https://adv.asahi.com/ 広告朝日



FWD富士生命 代表取締役社長兼CEO

友野紀夫さん

1954年岡山県出身。77年岡山大学法学部卒。同年千代田生命(現・ジブラルタ生命)入社。2007年AIGスター生命(現・ジブラルタ生命)社長。12年ジブラルタ生命副会長。13年2月から現職。

友野紀夫さんのおすすめ本棚

『文明が衰亡するとき』(新潮選書) 高坂正典・著
なぜ文明は衰亡してしまうのか? 繁栄の中に隠された失敗の本質とは? 栄華を極めた強国が衰退する過程を詳しく検証。その驚くべき共通項を洞察する。

『ローマ人の物語』全43巻(新潮文庫) 塩野七生・著
古代ローマ全史を活写。カエサルによる共和制の改革、初代皇帝アウグストゥスによるパクス・ローマの実現など古代ローマの英雄たちが躍動する超大作。

『ポールソン回顧録』(日本経済新聞出版社) ヘンリー・ポールソン・著 有賀裕子・訳
リーマンを潰し、AIGを救った理由とは? 未曾有の金融危機の中で米財務長官は何を考えたか。夜中に担当官を集めてプレスリリースを用意しました。結果的にAIGは公的資金の投入によって救済され、新CEOのエドワード・ドワイヤーが日本にも来て幹部の前でスピーチしました。私はその後彼と会い、背広につけていたAIGのバッジを、ドルで買ってと頼まれました。本国人社員は針の筈なので、誰もバッジをつけていないと言ったので、リデーは無報酬でCEOを引き受けていたので、私の報酬より高いバッジだと笑っていました。

『ペンタゴン・ペーパーズ』(CCGメディアハウス) キャサリン・グラハム・著 小野善邦・訳
ワシントン・ポスト紙、ニューズウィーク誌社主、ワーキング・ウーマンの先駆者が語る波瀾の半生。『20世紀を代表する自伝』と評されたピュリッツ賞受賞作。

『巨象も踊る』(日本経済新聞出版社) ルイス・ガースナー・著 山岡洋一・高遠裕子・訳
崩壊の瀬戸際にあったIBMにCEOとして乗り込み、こびりついた文化を変え、開く組織を作った辣腕経営者が、自らのマネジメントを余すところなく開陳する。

「好んで読んできたのは歴史物。特に地中海周辺の歴史に興味があります。前の会社で社長をしていた時は、業績の良い職員や代理店を対象に豪華旅行を実施し、イタリア、スペイン、ポルトガル、マルタ、クロアチアなどを行き先としていました。これら地中海沿岸の国々にはローマ遺跡が各地に残ります。『文明が衰亡するとき』は、ローマ帝国などの衰亡史について書かれた名著。キケロ、キポン、アダム・スミス、ハンチントンといった古今の知識人の衰亡論も豊富に出てきます。私がメモしたのは、通商国家ヴェネツィアが変わりゆくさま。ヴェネツィアは巧みな外交や造船技術などを通じて貿易都市として栄えました。しかし、豊かな時代が続いたがゆえに、『冒険を避け過去の蓄積によって生活を受けよう』という消極的な生活態度に変わっていった。著者の高坂正典氏は分析しています。経済が収縮する中で、生活水準を維持したいという気持ちの現れだろうとも書いています。こうした現象は今の日本にも見られると思います。社会、政治、経済などに現れる衰亡の兆しは、現代への問いかけにも感じられました。」

「『ローマ人の物語』は、例えは『ハンニバル戦記』の巻は、何度となく起こったローマ帝国とカルタゴの攻防史に興味があるので、ワクワクしながら読みました。このシリーズもたくさん読みました。心に残っているのは、紀元前2~3世紀に万里の長城を築いた秦が滅んだ一方で、街道を整備して異文化同士の往来を促したローマ帝国はその後形を変えつつも15世紀まで持続したという話。私は会社の破綻や統合を経験し、現在は多様なバックグラウンドを持つ中途採用者の多い組織を束ねています。」

「『巨象も踊る』は、1990年代に業績不振に陥ったIBMの再建に取り組み、復活させたルイス・ガースナーの経営観が詰まった一冊。冒頭に経営会議の様子が書かれているのですが、最初の会議では男性幹部の全員が白いシャツ、著者だけがブルーのシャツを着ていたが、数週間後の会議では、著者だけが白いシャツ。他の全員が色物のシャツだったそう。このエピソードだけで同社がいかに『大企業病』に侵されていた様相がわかり、その後の変化を予感させます。ガースナーは実行力と緻密なコミュニケーションによって社員を奮い立たせ、ビジネスモデルの転換に成功しました。スティーブ・ジョブズのようなカリスマタイプではありませんが、私のような凡人はジョブズよりもガースナーのように地道なリーダーに教訓を見つけられる気がします。」

色褪せぬ読書メモの言葉たち

「人々が抱く『保険』に対する感じ方・考え方を刷新すること」を目標に掲げ、成長を続けるFWD富士生命。代表を務める友野紀夫さんの読書は、もっぱら紙の本のこと。「読書体験が紙の手触りとともに心に残る気がするのです。読む時はメモを取ります。メモが進んだ本を部下たちに贈ったこともありました。」

「『ローマ帝国の壁ではなく道の戦略』を、企業戦略に重ねて読みました。『自分も渦中にいた』金融危機の詳細を知る。『ポールソン回顧録』は、プッシュ政権(息子の財務長官として金融危機の対応にあたった著者がリーマン・ショック前後のアメリカの政界の動きを克明に記しています。『リーマンの次はAIGか?』という状況の中、どんな判断からAIGを救済したのかも書いています。当時私はAIGスター生命現職。ジブラルタ生命の社長を務めていました。あれは親会社の情勢が緊迫した夜。金融庁から午前0時近くに『日本法人は破綻の心配がないと明朝発表してほしい』の指示があり、夜中に担当官を集めてプレスリリースを用意しました。結果的にAIGは公的資金の投入によって救済され、新CEOのエドワード・ドワイヤーが日本にも来て幹部の前でスピーチしました。私はその後彼と会い、背広につけていたAIGのバッジを、ドルで買ってと頼まれました。本国人社員は針の筈なので、誰もバッジをつけていないと言ったので、リデーは無報酬でCEOを引き受けていたので、私の報酬より高いバッジだと笑っていました。」

「『巨象も踊る』は、1990年代に業績不振に陥ったIBMの再建に取り組み、復活させたルイス・ガースナーの経営観が詰まった一冊。冒頭に経営会議の様子が書かれているのですが、最初の会議では男性幹部の全員が白いシャツ、著者だけがブルーのシャツを着ていたが、数週間後の会議では、著者だけが白いシャツ。他の全員が色物のシャツだったそう。このエピソードだけで同社がいかに『大企業病』に侵されていた様相がわかり、その後の変化を予感させます。ガースナーは実行力と緻密なコミュニケーションによって社員を奮い立たせ、ビジネスモデルの転換に成功しました。スティーブ・ジョブズのようなカリスマタイプではありませんが、私のような凡人はジョブズよりもガースナーのように地道なリーダーに教訓を見つけられる気がします。」

R 【読む】 Reading

「人々が抱く『保険』に対する感じ方・考え方を刷新すること」を目標に掲げ、成長を続けるFWD富士生命。代表を務める友野紀夫さんの読書は、もっぱら紙の本のこと。「読書体験が紙の手触りとともに心に残る気がするのです。読む時はメモを取ります。メモが進んだ本を部下たちに贈ったこともありました。」

「『ローマ帝国の壁ではなく道の戦略』を、企業戦略に重ねて読みました。『自分も渦中にいた』金融危機の詳細を知る。『ポールソン回顧録』は、プッシュ政権(息子の財務長官として金融危機の対応にあたった著者がリーマン・ショック前後のアメリカの政界の動きを克明に記しています。『リーマンの次はAIGか?』という状況の中、どんな判断からAIGを救済したのかも書いています。当時私はAIGスター生命現職。ジブラルタ生命の社長を務めていました。あれは親会社の情勢が緊迫した夜。金融庁から午前0時近くに『日本法人は破綻の心配がないと明朝発表してほしい』の指示があり、夜中に担当官を集めてプレスリリースを用意しました。結果的にAIGは公的資金の投入によって救済され、新CEOのエドワード・ドワイヤーが日本にも来て幹部の前でスピーチしました。私はその後彼と会い、背広につけていたAIGのバッジを、ドルで買ってと頼まれました。本国人社員は針の筈なので、誰もバッジをつけていないと言ったので、リデーは無報酬でCEOを引き受けていたので、私の報酬より高いバッジだと笑っていました。」

ノーベル文学賞作家の名著、日本で衝撃の漫画化

戦争は女の顔を

していない

小梅けいと
原作/スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ
監修/速水螺旋丸

「この原作を漫画化しようと考えた作家がいるとは想像しなかった。瞠目する。」
——富野由悠季さん

狙撃兵、軍医、書記、斥候、飛行士……旧ソ連で第二次世界大戦に従軍した、500人超の女性たちへのインタビュー集を原作に、今、日本人作家が国境を越えて描く、各界騒然の挑戦作。あの戦争の真実を明らかにする……。

第1巻 好評発売中
定価(本体1,000円+税)
ISBN978-4-04-912982-3

発売即重版!

KADOKAWA 発行 株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 ☎0570-002-301 (ナビダイヤル) https://www.kadokawa.co.jp/ 電子版も[BOOK☆WALKER](https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。※定価に付した番号はISBNコードです。ご注文の際にご利用ください。 ※本書帯コメントより一部抜粋